

『伊勢物語』第二十四段考

——殉愛とみやび返し——

久保朝孝

1

『伊勢物語』第二十四段は、運命の女神のいたずらにもてあそばれた哀れな女の悲劇として、あるいは報いられることのなかった純愛の物語として、多くの読者の涙をさそう章段であつた。⁽¹⁾

むかし、男、かた田舎に住みけり。男、宮仕へしにとて、別れ惜しみてゆきにけるまゝに、三年みとせこざりければ、待ちわびたりけるに、いとねむごろにいひける人に、こよひ逢はむとちぎりたりけるに、この男、来たりけり。「この戸あけ給へ」とたたきけれど、あけで、歌をなむよみていだしたりける。

あらたまの年の三年みとせを待ちわびてただこよひこそ新枕にみまくらすれ
といひいだしければ、

梓弓すしゆみま弓ゆみつき弓ゆみ年としを経てわがせしがごとうるはしみせよ

といひて、いなむとしければ、女、

梓弓ひけどひかねどむかしより心は君によりにしものを

といひけれど、男、かへりにけり。女、いとかなしくて、後しむにたちて追ひゆけど、え追ひつかで、清水しみずのあるところこゝろにふしにけり。そこなりける岩に、およびの血して、書きつけける。

あひ思はでかれぬる人をとどめかねわが身はいまぞ消えはてぬめる。

と書きて、そこにいたづらわづらになりにけり。

△第二十四段▽

ところが、この同じ章段について、野口元大氏は△愛の虐殺▽という解釈を示し、次のように述べて△みやび▽のもつ残酷な一面を鳴らした。やや長きにわたるが、そのまま引用する。

この段でも男はみやびの体現者として登場する。この男が京へ宮仕えにと出かけるのであるが、その際「別れ惜しみて」とあるから、女との交情は一方ならぬものがあつたにちがいない。その二人が別れるについては、前段のように、「もろともにいふかひなくてあらむやは」というような事情でもあつたのだろうか。しかし男は三年たつても帰らない。当時の法令によつても失踪と認めるほかなかつた。生活の窮乏と絶望は女の心をほとんど死にまで追いつめたことだろう。そうした女をからくも支えたのは一人の男の善意だつた。遂に二人の心は結ばれて結婚ということになる。ところが折も折、その当日、もとの男が女のもとに姿を現したのである。当然女の心は千々に乱れる。男への恋しさは言うまでもないが、自分は他の男と今宵を契つた身である。ああ、せめても一日早く帰ってくれたら、この嘆きが女の歌となる。

あらたまの年の三年を待ちわびてただ今宵こそ新枕すれ

事情を悟つた男は、女の新しい幸福を祈つて、そのまま立ち去らうとする。

梓弓檀弓槻弓年を経てわがせしがごとうるはしみせよ

自分だけのわがままを抑制して、すべてが円満に運ぶような配慮を忘れないたしなみ——これがみやびの精神である。なにはおいてもこういう掟に従おうとする男の心、それは「わがせしがごとうるはしみせよ」という言葉のひびきによくあらわれてはいないだろうか。あれこれの思いが一時にむらがりおこって、一度は戸を押さえた女であるが、そのまま立ち帰る男の後姿を見ては耐えきれず、一切をすてて本然の愛に生きようとする。

梓弓引けど引かねど昔より心は君によりしものを

しかし、男はあえてそれを振り切ってしまうのである。これは自分を忘れた女への恨みからではもちろんない。また、もう一人の男に義理を立てようとしたためでもない。ただ、自分の身を処するにみやびの精神をもつて貫きたい、風流士と呼ばれたいという願いのためなのである。この男の決意の前には、女の血を吐く叫びも冷たくはね返されてしまえばかりであった。女は絶望して死ぬ。その間にのこした一首、

あひ思はで離れぬる人をとどめかねわが身は今ぞ消えはてぬめる

ここで女は男を「あひ思はで離れぬる人」と呼ぶ。男の「みやび」の行為は、女の肉体の生命を奪ったばかりでなく、女の愛すら踏みじり、魂まで破ってしまったのである。

古典が、より広い解釈の多様性を許容することによって、その古典としての生命を絶えず更新し続けてゆくものであるとするなら、我々は常に可能な限りの新解釈を求め続けなければなるまい。以下に論じるのは、当段についての、そのささやかな試みのひとつに過ぎないが、おのずと、野口説とは様相を異にすることになるであろう。

新しい男と結婚する元の妻を祝福して立ち去ろうとする男の行為に、「ただ、自分の身を処するにみやびの精神をもつて貫きたい・風流士と呼ばれたい」という「願い」を読みとるかどうかが、解釈の分岐点となる。この読みを裏づける直接の表現は、当該本文中には見出だせない。この読みを支えるのは、ひとつの感受性である。とすれば、それとは相異なる別の感受性の存在も、同様に認められなければならないまい。

「この戸あけ給へ」と訴える元の夫の帰宅を、「あけで」峻拒する女が、その「戸」の内側から外へ向けて「いだしたりける」歌によって表現しようとした内容は、明らかに次の二点である。すなわち、その第一は、女が夫の帰りを三年間待ち通したということであり、第二は、今宵新しい男が初めて通ってくるということである。前者は離別以来今日までの、女の男に対する変わらぬ愛情を訴えたものである。女は決して待つことができなかったのではない。待ち通したのである。⁽⁴⁾ 後者は、それにもかかわらず男を拒絶するほかはない、女の現在の状況を伝えようとしたものである。⁽⁵⁾ 「ただこよひ」まで男の帰りを待ち続けてきた女は、また「ただこよひ」より新しい男との関係を開始しようとしている。その背馳した女の行為を繋ぐ時間表現として、「ただこよひこそ」は重い意味をもつ。

女からの、右の二つの内容を含む歌を読みとった男は、咄嗟に事の次第を了解する。既に三年が経過してしまっていたのだ。女の訴えと状況を理解して「いなむ」とする男の行動は、自らの△思い▽の断念により支えられるものであった。男の歌初二句の意味は未だ不明瞭と言わざるを得ないが、女へ贈った歌が祝福の意に満ちたものであることは間違いない。自分が長年お前をいつくしんできたように、新しい夫をいとおしめというのである。⁽⁶⁾ 女との再会、夫婦としての再出発を期待して帰郷した男は、今その願いを断念する。それは、「自分だけのわがままを抑制して、すべてが円満に運ぶような配慮を忘れないたしなみ」であるよりも、離郷以来音信も無く、時の経過とともに帰還の可能性が無限に弱まる中で、夫を信じ、「戸令」に定める三年が満ちるぎりぎりの日まで待ち続けた女の変わらぬ愛

情に対する「愛情返し」⁽⁹⁾であった。

再婚が容認される△三年▽という時間は、この場合社会的擬||法であるよりも、むしろ女の愛情の極限を規定する枠・手だてなのである。男は法の壁の前に断念したのではない。女の愛情に応えたのである。男は女の愛情に触れ得て、それに応え得る最善の方法を選択したのであった。それは、再会・再起という念願つまりは女を再び我がものとする、言うならば我が△身▽の要求を殺して立ち去るということであつた。男は女の再婚という、待ち続けた行為の結果ではなく、むしろそこに至らざるを得なかつた、そしてその結果とは全く背馳する経過をこそ、真実のものとして受けとめたのである。男の行動を支えるものは、女への真実の愛情である。それは、わが身を殺すことによつて愛する者の幸福を祝福できる愛情であつた。男は自らの愛に殉じたのである。

『伊勢物語』第二段で、「かのみめ男」を夢中にさせた女は、「その人、かたちよりは心なむまさりたりける」と規定されていた。みやびの本質は、「かたち」よりもむしろ「心」にある。男は、△身▽を捨てて△心▽を立てようとしたのであつた。心は行動によつて表現化されて、初めてその心としての実質を保有し得る。それがこの場合は、「立ち去る」という行動すなわち△身▽の断念であつた。ならば、この△身▽の断念は同時に△心▽の断念をも招来させずにはおくまい。この場合男の△心▽愛情は、行動のうちに全て凝縮・昇華してしまふのである。したがつてそれは、結晶・完成して持続なき終焉を迎えるのみであらう。△心▽の停止である。男が女に背を向けた行為は、その瞬間のうちに、女に対する至上の愛情と、決して復活することのない愛情の停止をも合わせ含んでしまふものであつた。女を最も深く愛するためには、男は女をわがものとすることを断念し、同時に女をこれ以上思い続けることも停止しなければならぬのであつた。

この男の行為は△みやび▽なるものとして十分に賞揚されてよい。そして、男の行為はこれで完結するのである。

女が、「一切をすてて本然の愛に生きようとすする」のは、この男の△心▽の實質に触れたからである。突然の再会による感亂が収まったためなどではない。男の眞実の愛情に触れて、そこで初めて女は自らの△心▽の在り所に覺醒するのである。

梓弓ひけどひかね⁽¹⁾ど昔より心は君によりにしものを

女は、男の三年ぶりの帰宅に際して戸を固く閉ざし、これを拒んだ。現実の△身▽を優先したのである。女は、当然あつたであろう他の男たちからの求愛をも拒み通し、ただ一人の男Ⅱ夫のためにだけ開かれていた心の戸を、満三年目にあたる「ただこよひ」閉ざしてしまつていたのであつた。女の行動は、いわば受け入れるべき男と状況の逆転による混亂であつたとも、見れば見られよう。しかし、ともかくもその結果として、女はその拒絶の行為によつて現実の我が△身▽を優先させてしまつたのである。その女が、今男の心底からの愛情をたたえた歌にふれることによつて、一瞬失いかけた自らの△心▽の實質を回復しようとするのである。「むかしより心は君によりにしものを」と訴えかける対象は、男であると同時に、女自身でもある。

しかし、男は後も振り返らず立ち去つてしまつた。「女、いとかなしく、後にたちて追ひゆけど」、追いつくはずとてない。また、追いついたとて男が踵を返すはずもない。男の行為は、既にそれ自身として完結してしまつてゐるのだから。これを残酷と見るのは、女に対する侮^{あなご}りである。女はわが△身▽を立てようとして男を追うのではない。男の愛情を取り戻そうとして追つてゐるのではない。なぜなら、既に男の愛情は十分感受してゐるのだから。

ならば、なぜ男を追うのか。ここで、追うという行為は、あくまで△形▽である。追う行為の中で女は、たとえ一瞬たりと言えども、△身▽の優先によってなおざりにしてしまった男への愛Ⅱ△心▽を、自らのうちに取り戻そうとしていたのである。その場合、女が△心▽を立てる道はひとつしかないはずである。男がそうしたのと全く同じあり方によって、男に応えることである。

女はわが△身▽を滅ぼすことによって、男に対する△心▽を立てるほかはないのである。男への真実の愛情に目覚めた今、女にとってもはや退く道は残されていない。新しい夫との生活は、もはや女の△身▽も△心▽も滅ぼしてしまふこと必定である。男がわが△身▽を断念して、△心▽を立てたように、女も男への愛という△心▽を立てなければならぬ。その場合、自裁は最も安易な方法である。そうではなくて、女は男を追い続けるのである。女にとつて、追うことは男を△思う▽ことである。「わが身は今ぞ消えはてぬめる」極限まで、わが△身▽を燃焼し尽くし、男を愛しぬかなければならぬ。そうすることによって、はじめて女は男への愛を立て、自らの△心▽を取り戻すことができるのである。

「およびの血して、書きつけ」られた女の歌に込められているのは、△身▽の消尽によって完成された△心▽の姿であった。△身▽は消え果てるが、△心▽は消えない。「そこにいたづらになりけり」というその時点で、女はたとえ旋踵の間とはいえ、失いかけた△心▽を回復・完成し、その行為を完結し得たのである。女もまた、その愛に殉じたのである。

男の、断念による愛の完成が「みやび」と呼び得るなら、女の、身の破滅すなわち命をかけた△心▽の完成の姿も、やはり十分「みやび」と呼ぶに値しよう。もしそれが許されるなら、女の「みやび」が男の「みやび」によって触発されて完成したものであるところから、この「みやび」の贈答を、私に「みやび返し」と呼ぶこととする。

ところで、既に「身」と「心」の意識は『伊勢物語』作者のものであった。そして、そのどうにもならない分裂の様相は、第十三段にも見られるものであった。

むかし、武藏なる男、京なる女のもとに、「聞ゆればはづかし、聞えねば苦し」と書いて、上書に「武藏鑑」⁽¹²⁾と書いて、おこせてのち、音もせずなりにければ、京より女

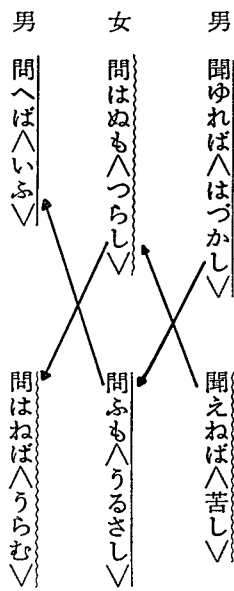
武藏鑑さすがにかけてたのむには問はぬもつらし問ふもうるさし

とあるを見てなむ、堪へがたき心地しける。

問へばいふ問はねばうらむ武藏鑑かかる折にや人は死ぬらむ

女への文に、「聞ゆればはづかし」と記さねばならなかった男の心情については、「倫理的な羞恥と解しては当るまい。妻を持つまでに武藏に住みついた自分を、もはや都びとではなくなってしまったと恥じるのである」とする渡辺実氏の解説が最も当を得ている。冒頭の「武藏なる男。↓京なる女」の対比が一層際立って読めてくるのである。そして重要なことは、この都人としての恥辱を敢えて堪え忍んでまでも、「聞えねば苦し」と自らの結婚にこだわり続ける男の心情なのである。なぜ、聞けば不愉快を誘うこと必至の事態をもとの妻に伝えなければならぬか。無論、倫理的な理由などではない。それは、この男がまだ京の妻に対する愛情を強く意識しているからなのである。男はもとの妻を忘れ得ないでいる。男は「心」を都に残したまま、「身」を武藏に定住させざるを得ない状況に追いこまれてしまっているのである。この「武藏なる男」と「京なる女」との文の贈答を「示するならば、次の通り

となる。



図示された錯綜は、二人の置かれた状況による、どうにも解きほぐし得ないもつれをそのまま表わすものであり、男と女は、それぞれに相手に対する思いの愛情がありながら、状況打開の手段が全く閉ざされてしまっていることが知られる。特に、線部の贈答は重要である。「聞えねばは苦し」と、男が変わらぬ思いを遠回しに訴えたのに対し、女から「問はぬもへつらし」と、男同様変わらず思い続けていることが表明され、さらにこれを男が「問はねばへうらむ」と確認している。男は、二人の間の不変の愛情、つまりは「心」を確認するのである。しかし、それにもかかわらず、二人の関係がこれ以上展開し得ないのは、一にかかって男の「身」が武蔵にあること、すなわち京にないことにある。男の、京にある妻への恋情は、そのまま男の「心」が京にあることを示すものであり、東国武蔵に在る「身」との乖離、このことこそが二人の恋の障害なのであった。第三、六段所謂「二条后物語」からの続きとして第十三段を読むなら、男が都へ決して帰れない事情を抱えていたことは明白である。⁽¹⁵⁾

ここに到れば、この章段の主題が、東国における結婚Ⅱ鄙定住化にともなうて△身▽と△心▽とを引き裂かれてしまった男の、進退維れ谷^よまった苦悶であることが明瞭となる。△心▽が誠実であるほど、苦惱は一層深刻なものとなる。それは、自らを死に到らしめるほどの苦衷であり、同時に女への思いなのであった。

ここで男が△心▽を捨て去ってしまうことは、現実的な一つの解決の途であろう。京の女を忘れ、武蔵なる女にその△身▽の全てを委ねてしまえばよい。しかし、それはできないのである。男が、その生の最後の誓として、都人ととしての誇りであるからだ。当段における△みやび▽は、死ぬほどまでに△心▽を都にとどめておかずにはいられなかった、男の△みやび▽あるいは都人としての△心▽への執着の姿に発現されているのである。

先に△身▽と△心▽との乖離ということについて触れたが、この場合それは、直接的には空間によって△心▽から△身▽が引き離されたことに起因したのであった。いわば空間による△身▽と△心▽の分断である。それに対して第二十四段は、時間による△身▽と△心▽の分裂ととらえることができる。

5

先に述べたように、第二十四段では男は男の、女は女の、それぞれの△みやび▽を△心▽の完成によって達成したのであったが、それにもかかわらず何故再び相逢うことのない悲劇に終わらざるを得なかったのであろうか。それは、女の臨終の折の歌によって解き明かすことができる。

女の歌初句「あひ思はで」については、「私の愛に応じてくれることなく」と解するのが一般であるが、振り返って見れば、男の断念は女への愛ゆえのものであった。そして、女もそれを了解したのである。とすれば、この解は当た

らない。ここは「お互いに思い合うことがなく」、「ともに思い合うことがなく」と解すべきである。⁽¹⁶⁾ 今述べたように、男も女もともにそれぞれへの愛ゆえに△身▽を犠牲にしたわけだから、この解もやはりあてはまらぬようにも見えるが、「ともに」は「同時に」の意味なのである。すなわち、これは相手を思う時機Ⅱ折が一致しなかつたという謂なのである。離別の状態であった三年間、ひたすら夫を思い、その帰りを待ち続けていた女が、三年という日が満ちたまさにその当日、新枕を契った男への心用意のために一瞬弛緩した緊張の間隙に、その間隙ゆえに全く思ひもかけなかった夫との再会の機会に遭遇して、女は思わず拒む。男の思ひはつい一日前と何ら変わることはない。むしろ、この状況に直面して、その思ひは一層純化されたことである。女の愛情が復活するのは、その後であった。離別以来四年目の初日、遂に二人の△心▽は同時機に交錯することがなかった。ここで問題にされているのは、思ひの強弱とか、思ひの内容ではない。思ひの△時機タイムシチュエーションの一致▽ということなのである。

以上が「あひ思はで」と、女に慨嘆される内実である。愛し合う男女の、極限状況下に置かれた折の、ほんの一瞬のお互いを思う「時間のズレ」が、この男女における所謂悲劇を生み出すことになってしまったのである。お互いの△心▽の時機的不一致により招来された△身▽と△心▽の分断なのであった。△みやび▽は、このように時間的に極めて危い均衡の上に、それを志向する者の心の洗練の度合とあいまって、かろうじて保障されるものであった。

さて、この△心▽の高さと、その毛ほどの弛緩をも許さぬ作者の姿勢は、既に前段中にも見出だすことができた。

(前略)

さて年ごろ経るほどに、女、親なくたよりなくなるままに、もろともにいふかひなくてあらむやはとて、河内かみの国高安たかやすの郡ぐんに、いき通ふ所いできにけり。さりけれど、このもとの女、あしと思へるけしきもなくていだしやりければ、男、こと心ありて、かかるにやあらむと思ひうたがひて、前裁せんざいの中にかくれるて、河内へいぬる顔に

て見れば、この女、いとようけさうじて、うちながめて、

風吹けば沖つしら浪たつた山よはにや君がひとりこゆらむ

とよみけるをききて、かぎりなくなしと思ひて、河内へもいかずなりにけり。

(後略)

△第二十三段▽

筒井筒の仲を成就して夫婦となつた二人であつたが、女の両親の相次ぐ死によって生活不如意となり、やむなく男が他の女のもとへ通うようになった。しかし、女は不快と思つている様子もなく男を送り出してやる。不審に思つて男が植え込みの陰から様子を窺うと、女は念入りに化粧をして夫の旅の安否を気づかっているのである。それを知つて後、男は他の女のもとへ通わなくなった、というのである。妻たる者のたしなみとして、夫不在の間もたいそう念入りに化粧をしていたというあたり、「ひとりうちとけぬ心用いは、心を高く保つことで、心の洗練の一つの姿」であること、疑いを容れない。

また、ここでの女の姿勢は男を思うことで一貫しているのである。経済的に生活を支えることができないという最大の弱点を背負つた女が、妻としての自己を通すということは、ひたすらに男を愛し続けることのほかはないのである。寛容にして情愛深く見える女の態度を支えるのは、実は凛冽なまでの緊張感であり、高き∧心∨への飽くなき志向なのである。

6

さて、第二十四段の男女、なかんずく女は果たして幸福であつたのか。互いに愛し合っている男を、自らのもとに

取り戻すことができず、空しく死んでいったという点から見れば、これは不幸であったというのが通りやすい解釈であろう。「あわれな人生の姿を描いた⁽¹⁸⁾」とするのが一般である。しかし、運命の微妙な悪戯によって悲運の淵に立たされたながらも、あくまで自らの \wedge 心 \vee を高く保とうとし続けた、換言すれば \wedge 身 \vee を滅ぼしてなお男への愛情を貫き通した、という点では幸福であったと言えるのではないか。いや、むしろこの女の生き方は、世間的な幸・不幸の範疇を遙かに越えたところで、自立・自足しているのである。「清水のあるところ⁽¹⁹⁾にふしにけり」と語られる女の終焉の地は、あたかも女の魂の救済を、そして、「みやび返し」により自らの \wedge 心 \vee を完成した女の満足を暗示しているかのごとくである。

注

(1) たとえば、阿部俊子氏は「女は人情の機微にゆらぎながらも純情をつらぬいており、男も筋を通し、女に対する情をもって相手の立場を考慮する暖かさをもっているのに、そのためにかえって悲劇で終るといふあわれな人生の姿を描いたことになって

いるものである。」(『伊勢物語』(上) 全訳注 講談社学術文庫、昭54・8)と言っている。

(2) 『伊勢物語』本文の引用は、以下全て新潮日本古典集成『伊勢物語』 \wedge 渡辺実校注 \vee (昭和51・7)による。

(3) 『古代物語の構造』(有精堂、昭44・5)所収「みやびと愛―伊勢物語私論―」。

(4) 堀口康生氏「待つ女―井筒の手法」(図説 日本の古典『竹取物語・伊勢物語』集英社、昭53・7所収)。

「第24段の『新枕する女』を、『待つことのできなかつた愚かな女の悲劇』として読む読み方に与(くみ)したくない。第23段は「待つ女の幸せ」を描いたのにつづいて、第24段は『待つ女の哀しみ』を描いたのだ。」

(5) 松尾聡・永井和子両氏『校註 伊勢物語』笠間書院、昭43・4。

「半年が一年、一年が二年となると、夫^{おとこ}といっしょに働いていてさえつらかつた喜し向きは、女一人にいよいよ重くのしかかった。容赦なく取り徴る税物をととのえるだけでも女にとっては死に近い苦しみであった。 \wedge 中略 \vee 男のつつましい、しかしねんごろな求愛は、変らずにつづく。苦しんだ女は、「三年が明けたら」と男にいう。いまや、三年という法律のきめた便

宜的な年限は、それを一日でもすぎたら夫は確実に帰らぬものと女に信じこませるだけの魔力をもって女の心に君臨するに至っていたのである。」

6

現代の注釈によれば、大体次の三書によって代表される三通りの解に分類できる。

神楽歌に「弓といへば品なきものを梓弓真弓槻弓品も求めず」を本歌として詠んだものとし、「宮仕えにも出るほどして、しなじなのつらいことをしのびつつ、長年の間、私はあなたをいとしく思ったのだが、そのように、あなたも、新しい夫と仲むつまじく暮しなさい」の意という。△日本古典文学大系▽

・年にかかる序詞とみる。「あづさ弓」は梓。「ま弓」は槻。「つき弓」は槻の木で作った弓、弓は月を連想させるものでもあり、つき弓から年をみちびいた。△日本古典文学全集▽

・△夫は必ずどの男と決めねばならぬものではないかも知れず、あなたは別の男とでも夫婦として幸福にやっていけるかも知れない。私が長年あなたにしたように、これからは新しい夫を大切にしていきなさい▽（口訳）。神楽歌に「弓といへば品なきものを梓弓真弓槻弓品も求めず」（弓と言えばどれでも差別はないことよ。梓弓でも真弓でも槻弓でも、どれも結構だ）とあるのをふまえた歌と見る。△新潮日本古典集成▽

(7) 「愛し」は、△日本古典文学全集▽『萬葉集』巻第十五³⁷²⁹番歌頭注によれば、「ウツクシが弱少の者に対していたわってやりたい気持を表わすのに対して、ウルハシは同等以上の者に対して賞讃する気持でいうことが多い。したがって、男から女へはウツクシ、女から男へはウルハシが普通」とのことであるので、この歌がもとの男から新しい男に対して与えられたものだとする解はとらない。

(8) 『令』の「戸令」に次のように定める。

「雖^レ已成、其夫没^レ落外蕃、有^レ子五年、無^レ子三年不^レ崩、及逃亡、有^レ子三年、無^レ子二年不^レ出者、並聽^レ改嫁。」

(9) 相互の愛情の交錯を主題としたものに、たとえば第十二段がある。
むかし、男ありけり。人のむめを盗みて、武蔵野へ率てゆくほどに、盗人なりければ、国の守にからめられにけり。
女をば草むらのなかに置きて逃げにけり。道くる人、「この野は盗人あなり」とて火つけむとす。女わびて、

武蔵野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり

とよみけるを聞きて、女をばとりて、ともに率ていにけり。

右引用中傍線部の解釈については、「女が歌を詠んだのを聞きつけて、追っ手が女を捕え、（その後男をも捕えて）共に連

れ帰った」とするものと、「女の歌を聞いたのは、女を一旦置き去りにして逃げようとした男であって、我が身を犠牲にして男を逃そうとする女の心に感じ、引き返して女の手をとり、ともに逃げた（が遂には捕えられた）」とするものと大別して二通りあるのだが、「夫もこまれり」と歌う女の嘘をより明確に説明し得る、折口信夫に淵源を発する後説の方がより妥当のように見える。そして、△身△の破滅を覚悟しながらも、女の愛情に依って引き返し、ともに逃げようとした男の行為が、私にいう「愛情返し」である。

増田繁夫氏「伊勢物語の時間構造」日本文学、昭52・11。

「一度は女を棄てようとした男が、女の歌によってそれまでの充実した時間、高潮した感情の世界にひき戻され、破滅をも覚悟してその世界に生きようとした、というのがこの段の主題であって、末尾の部分は、捕われ破滅することを予感しながらもお女女をつれにひき返した男の行動と解さねば、この物語の一段とはなり得ないのである。」

(10) 片桐洋一氏編 鑑賞日本古典文学『伊勢物語・大和物語』（角川書店、昭50・11）本文鑑賞、第二段。

「昨夜はあなたとともに起きていてもなく寝ていてもない、いわば無我夢中で夜を明かしましたが（男の歌上句『おきもせず寝もせず夜をあかしては』の口訳）」

(11) 女の歌初二句の意、やはり明瞭さを欠くが、「あなたが私の心を引こうが引くまいが」とするのは如何。男は既に立ち去ろうとしているのであるし、この男の行為及び「梓弓ま弓つき弓」の歌に恋の手練を読みとろうとするなら、一段の主題はまことに卑小なものとならざるを得ない。「ひけどひかねど」は、「この戸あけ給へ」「あけて」と関連して、女が戸を開けようが開けまいが、の意とも考えられるが、「心は」に注意するならば、他の男が私の身を引こうが引くまいが、すなわち再婚しようがすまいが、の意となるであろうか。

(12) △新潮日本古典集成△頭注。

「『鑑』は馬にかける馬具で武蔵の名産。『武蔵鑑』の上書は、『武蔵より奉る』の意と、『逢ふ』（武蔵で妻を持った）の意とを含ませたものか。」

(13) 本稿は『伊勢物語』の作者・成立過程については関心の埒外であるが、片桐洋一氏の三元的成立論によるならば、本稿引用（本文・注）中、第九・十段を除けば、他は全て第三次成立の章段である。

(14) 注(12) 掲出書に同じ。

(15) 「むかし、男ありけり。京にありわびて東にいきけるに」△第七段△

「むかし、男ありけり。京や住み憂かりけむ、東のかたにゆきて住みどころ求むとて」△第八段▽
「むかし、男ありけり。その男、身を要なきものに思ひなして、京にはあらじ、東のかたに住むべき国求めに、とてゆきけり」△第九段▽

「むかし、男、武蔵の国までまどひありきけり」△第十段▽
岩波古語辞典「あひ」(「接頭」)の項。

①互いに、の意を添える。②一緒に、ともどもに、の意を添える。

(17) 注(12) 掲出書に同じ。

(18) 注(1) 掲出書に同じ。

(くぼ・ともたか／専任講師)